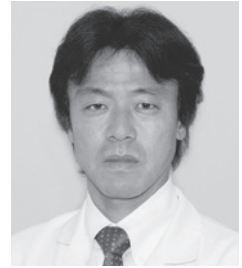


## 10th World Congress of the International Hepato-Pancreato-Biliary Association (IHPBA) (1)

大塚由一郎

東邦大学医学部外科学講座一般・消化器外科学分野 (大森)

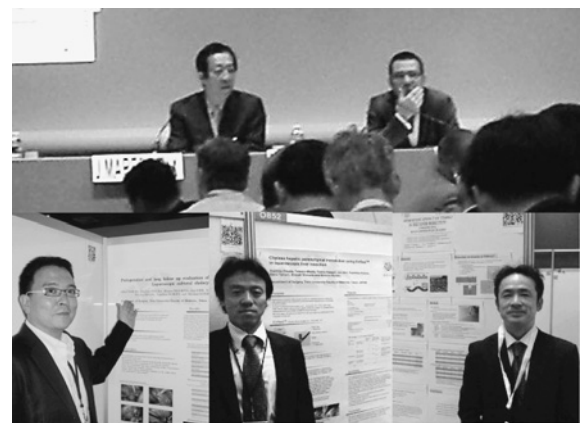


今回、2012年7月1～5日にフランス、パリにて開催された、10th World Congress of the International Hepato-Pancreato-Biliary Association (IHPBA)に参加した。本学術集会は2年ごとに開催される、肝胆膵外科系領域の国際学術集会である。当科からは金子弘真教授、田村 晃先生、前田徹也先生、そして自分を含め計4名が参加した。会議場は“芸術の都”の中心部から凱旋門をぬけ、西に位置するPalais des Congrès de Paris (Paris Convention Center)で行われた。

フランスには有名な外科医が数多いが、肝胆膵外科領域では、人の肝臓の区域を分類したことであまりにも有名なDr. Couinaud、肝門部胆管癌を進展範囲から分類し肝移植のパイオニアでもあるDr. Bismuth、そして肝切除術においてliver hanging maneuverという手技を開発したDr. Belghitiが自分の頭にまず浮かぶ。以前Dr. Belghitiの肝切除術、元祖“生”hanging maneuverを一目見るためにUniversity of Paris, Beaujon Hospitalを訪れたことがあったが、無駄がなく淡々と運ばれる芸術的な手術の前に、大きな感動を覚えたことが思い出される。本大会のcongress presidentはそのDr. Belghitiであり、参加者は3000名、演題数は約2000件とこれまでのIHPBA国際大会中で最多であったと報告された。ここでは肝胆膵外科における最先端の手術手技や成績、研究成果の報告とともにpost graduate courseなども催されたが、ここ最近の肝胆膵外科領域における腹腔鏡手術のめざましい普及と進歩が、これまで以上に強く印象付けられたところがあった。自分は“Clipless hepatic parenchymal transection using EnSeal™ in laparoscopic liver resection”という肝臓の腹腔鏡手術に関する発表の機会を得たが、会場内ではどこも全世界からの素晴らしい発表と、活発な議論が繰り広げられていた。



前田徹也先生 (左から1番目)、金子弘真先生 (左から2番目)、田村 晃先生 (一番右)、と Paris Convention Centerにて



学術発表の様子 (上:金子先生、左下:田村先生、中下:筆者、右下:前田先生)

また、圧巻は学会主催の懇親ディナーパーティーであった。なんと、19世紀美術専門の美術館であるオルセー美術館 (Musée d'Orsay) を貸し切って行われたのだ。マネ、



全員懇親会はオルセー美術館で行われた。

モネ、ルノワール、ゴッホなど印象派画家の作品が数多く収蔵されていることで有名な本美術館は、もとはオルセー駅の鉄道駅舎兼ホテルであったというが、取り壊さずに美術館にしたのがよくわかる、スケールの大きなこれも芸術

品であった。普段ここには多くの来館者がひっきりなしに訪れているはずであるが、貸し切りということで自分を含め参加者達は皆、通常ではありえないほどゆったりとしたなかで歴史的美術品の数々を鑑賞することができた。またパーティー会場にはまさに肝胆脾胃外科領域の“star surgeons”が一同に会しておりこちらもかなりの迫力であった。明るく優しい先生方ばかりで多くの交流を持つことができたが、会場に用意されていたシャンパンやワインがなくなってしまうほど盛況な会であった。その後、夏の遅い宵、セーヌ川沿いを皆で歩いたが、巨大な宮殿のようでもあるオルセー美術館の背後から昇る蒼白く大きな月、そしてその明かりをまばらに映し出すセーヌ川が、また絵画のようでなんとも印象的であった。昔も今も変わらぬパリの光景なのであろう。

貴重で素敵な経験をさせていただいたが、この場をお借りして外科学講座一般・消化器外科学分野 金子弘真教授をはじめ医局員の皆さんに感謝申し上げます。